

それでは改めまして今日の主題説教のテーマは「聖書」であります。主題聖句というのを先程言いましたが**第2テモテ 3:16**です。『聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。』聖書というのは英語では“バイブル”と言って、和製英語にもなって、“バイブル”と言えば何らかの権威あるものという、そういう意味合いで巷でもよく使われるかと思えます。その英語の“バイブル”というのは、もともとはギリシャ語の“ビブロス”という言葉から出ております。“ビブロス”というのは、昔“紙”とか書くものとして使われて、それらが英語の“paper”（ペーパー）というもので、そこから聖書というものは、“本”そして“本の中の本”というような位置付けで、それが特別な本なので、ただの書ではなくて、“聖書”というふうに呼ばれるようになったわけです。で、そのような“バイブル”というのはもう世界的にもロングセラー、ベストセラーとして最も権威あるものということで、特にそれらは先程も紹介したように、比喩的に特定の分野で何かしら権威ある書物全般にも使われるわけです。”The Bible”と言えば、それは今私たちが手にしている聖書ですけれども、よく〇〇のバイブルというようなタイトルの書物を皆さん目にしたことがあるかと思えます。皆さんの家の本棚にもひょっとしたら何らかのバイブルというのがあるかもしれません。それは、勿論第一級の資料とか、決定版とか、永久保存版、必携書というような意味合いで、何らかのバイブルというふうに使われるわけですけれども。インターネットの最大の書店のアマゾンというところで検索をしてみました。2012年の今日の4月29日現在の結果ですけれども、検索結果の数を今皆さんにちょっと紹介しておきたいと思えます。アマゾンでは、“バイブル”とカタカナで入力しますと、4077件ヒットします。“バイブル”と名のつくものが4077件あるということです。ちなみに漢字で“聖書”と入力しますと、6768件ヒットします。で、よくよくそれを見ると殆どが“聖書”とか“バイブル”そのものとは無関係なものばかりであります。例えば“ダイエット・バイブル”とか、ダイエットの決定版というような意味合いで使われるわけです。“犬の幸せバイブル”とか、または“仏教のバイブル”なんていうものもあります。“必携四国御遍路バイブル”とか、そんなものもあるわけですけれども。キリスト教以外の宗教の聖典も“バイブル”と呼ばれたりして、あまり日本人の間では正しく認識されていないようであります。“バイブル”という言葉だけが独り歩きをして、巷では氾濫してしまって、“バイブル”とは一体何なのか、“聖書”とは一体何なのか、あまりよく認識されていないようであります。しかし聖書を本当に開いて見ますと、そこには確かに人間の必要のすべて、ニーズのすべて、また関心事にまつわるありとあらゆるトピックです。皆さんが普段日常的に疑問に思うこと。「人はどこから来たのだろうか。何のために生きるのだろうか。」とか、「本当に幸せになりたい。成功したい。繁栄したい。」そういったことも含めて、いろんなトピックが聖書の中には網羅されております。要するに人間に関わる、人生に関わるすべての領域にこの聖書というものは、関係しております。言及しているわけです。ですから、聖書は昔から『人生の羅針盤』というふうにも呼ばれてきました。この中に夫婦関係で行き詰まっている人があるでしょうか。“夫婦円満バイブル”なんてものがあつたら是非読んでみたいという人があるでしょうか。是非そういう人は、今皆さんが手にしている聖書を開いて見て下さい。この中に子育てで行き詰まっている人があるでしょうか。「子供と全然コミュニケーションがとれないんです。全然心を割って話すことが出来ないんです。子育てバイブルなんてものがあつたら是非読んでみたいです。」という人があるならば、是非この聖書を開いて見て下さい。「今いろんな必要があつて困ってるんです。仕事を首になりました。」とか、「本当に経済的に困ってます。」とか。または「健康問題が不安なんです。」と。そういう人は是非この聖書を開いて見て下さい。そこにはすべての問題・悩みに対する答えが、鍵が、書かれ

ております。提示されておりますので、すべての必要が満たされる。それが聖書の中に約束されております。

で、聖書というものについてもう少し、一般的な話をしたいと思いますけれども、史上最大のロングベストセラーであることぐらいは皆さんは認識されていると思います。具体的にどれほど聖書が世界に普及しているのかということも、ちょっと触れておきたいと思うのですが、聖書はギネスブックによって公式に認定されておりますけれども、世界で最大のロングベストセラーです。発行部数についてはマチマチいろいろな説がありますがけれども、1815年から1998年にかけて全世界で聖書がどれほど発行されたかという統計があります。それに拠りますと推定で約3880億冊という数字です。これは1815年から1998年にかけての話ですから、その前後というものは勿論カウントされていないわけです。他にもいろんな統計がありまして、国際聖書協会の発表に拠りますとA.D.2000年の1年間に世界中の聖書協会によって約6億3300万冊が、配布若しくは販売されたと記録されております。

で、日本ではどうだろうかといいますが、日本聖書協会の発表に拠りますとこれは1874年から2004年にかけての統計ですけれども、3億4584万1334冊が日本人の手に渡っているということでありまして。日本でもそれだけの聖書が普及されてます。学生時代を思い出して頂きたいと思いますが、時々おじさんたちが校門のところで新約聖書を配布したり、学校で聖書を手にしたことがあるという方とか。または看護師の人たちも看護学校で聖書を配られたことがあるとか。中には刑務所の中で読みましたという人もあると思います。そういう病院とか公共施設にも聖書というものが配布されていて、そうしたところでも目にされた方も多と思います。

で、世界中にこの聖書は普及しているんですけれども、聖書布教会世界連盟の発表に拠りますと、その翻訳されている聖書の言語の数ですけれども、現在では(2008年の記録ですけれども)2454言語に聖書は翻訳されています。そのような聖書をまだ読んだこともないという人があるならば、その人はとても国際人とは言えないかと思えます。聖書はただ単にキリスト教の経典というところにはとどまりません。宗教を超えて、民族を超えて、国家も勿論超えるわけですけれども、文化も超えて聖書というものは古今東西の人たちに読まれてきて、そして多くの人たちの人生を変えてきたものであります。キリスト教徒でなくても是非聖書ぐらいは読んでおきたいというものであります。一般教養としても聖書を読まれる方もいるわけですけれども、聖書も読まずに「神なんか信じない。」とか。聖書を読んだこともないのに、キリスト教のことを誤解しているとするならば、それは残念なことですけれども、偏見でしかありません。せめて聖書を読んでみてから、イエス・キリストとはどんな救い主なのか。信じるに本当に値するお方なのか。キリスト教の説く教えが本当に正しいのか、真理であるのか。本当にそれが役に立つのか。自分の目で見極めて頂きたいと思えますし、勿論学問的に学んだところで聖書は何の力も発揮しないかと思えますけれども、もし一度試してみようというふうな思いで、信じてみようというふうな思いで聖書を開くならば、きっと神様はあなたの心に、目に見えないご自身の姿をハッキリと見えるようにして下さると思えます。私もそのようにして聖書を通して、目に見えない神様と出会うことが出来ました。小さな子どもでも聖書の言葉を通して、神を素直に信じる事が出来ます。今月には6歳の女の子も小学生の兄弟もイエス・キリストを信じて、そして洗礼を受けるということも、自らの信仰の決意によって受けることが出来たということをお知らせしました。そのようにして聖書は幼い子どもにも分かるものとして与えられていることも覚えて欲しいと思えます。

そして、聖書の話はまだ続けて行きたいと思えますが、世界で最も古い書物、また同時に世界で最も多くの写本をもつ書物として、文献史上最も価値のある、最も信憑性の高い書物であるということも知って欲しいと思えます。これは具体的には書誌学という学問の話になるんですけれども、聖書というのは皆さんが日本語で翻訳された聖書を手にしているわけですけれども、旧約聖書と新約聖書、合わせて66巻の聖

書を皆さんは一冊の聖書として、日本語に翻訳されたものとして手にしているわけです。ところがこの聖書というのは、66巻からなるもので、旧約聖書は全部で39巻、新約聖書は全部で27巻から成っております。で、最も古いところというのは、聖書の最初の部分。すなわち旧約聖書の最初の五書。創世記から始まって申命記までの五書。これはあのモーセという人が編纂したとされているもので、モーセ五書というものです。その部分はB.C.15世紀に編纂されたというふうに言われております。で、一番新しいところは、新約聖書。丁度イエス・キリストがこの地上で活躍された時代ですが、今から二千年前、すなわちA.D.一世紀です。紀元一世紀。そのように旧約聖書から新約聖書まで約千六百年間というタイムスパンをもっているわけです。その中で聖書というものがあつた時代において、ありとあらゆる人々によって、ありとあらゆる地域において書かれてきました。書かれた言語は、旧約聖書は主にヘブル語若しくはヘブライ語という言葉です。これは今日のイスラエルの母国語でもあります。で、一部はアラム語という言葉でも書かれております。これはヘブル語とは非常に似通った親戚のような言葉です。当時古代世界において、オリエント世界においての世界共通語がアラム語でもあつたわけです。

で、新約聖書はギリシャ語で書かれております。これは新約聖書の書かれた時代、ギリシャ語が世界共通語だったからです。今日で言えば、英語が世界の共通語のように使われておりますけれども、最も流通している言葉で聖書はそれぞれの時代に書かれてきたわけでありまして。

で、どれほど古いかということは、B.C.15世紀というのは、具体的な年数として触れましたけれども、例えば皆さんの週報にもこれは記しましたけれども、仏教の經典の代表的なものに『三蔵』というものがあつます。その『三蔵』というものはB.C.一世紀に書かれたものであつます。で、イスラム教の『クルアーン』(またはコーランというもの)、これはもっと新しくA.D.七世紀であります。日本で最も古い書物。それは神道の『古事記』それに次ぐものが『日本書紀』と呼ばれるものですが、それらはA.D.八世紀です。旧約聖書の最も古い部分はB.C.15世紀だと言いましたから、日本で最も古い『古事記』や『日本書紀』というのは本当に新しいもので、新約聖書よりもはるかに新しいものです。「そのような古い世界最古の古典中の古典と呼ばれる聖書。それは果たして本当に現代の私たちにも何か通じるものがあるだろうか。そんな古いものはやっぱり古すぎて、現代人の私たちに合わないのではないか。その中に書かれているものはほとんど神話であつて、そこには事実だとか科学といったものは含まれていないのではないか。ですから現代のこの科学万能の時代において、聖書なんてものは古びたもので信頼に値するものではない」と。まあ参考までに読むような古い文学書みたいな感覚で捉えている人もあろうかと思つます。しかし、実際のところ聖書というものは書誌学の観点で言いますと、文献史上最も信憑性の高い書物だということを言いました。具体的にそれはどういうことかと言いますと、聖書はそれぞれもともとは旧約の場合はヘブル語とまたアラム語。新約の場合はギリシャ語で書かれていると言いました。で、それぞれ基の本があつたわけです。原本というものがあつたわけです。で、現在はその原本というものは存在しません。でもその原本を書き写した筆写した写本というものが存在します。で、今新約聖書の話だけにとどめておきたいと思つます。旧約聖書は二十世紀最大の発見と呼ばれる死海写本・死海文書というものによって、その記録の正しさというものが証明されました。これについては今異論を唱える人はいないと思つます。旧約聖書に書かれている記述というものは、実に歴史的にも正しいもので、勿論それに加えて考古学の発見等で旧約聖書に書かれている人名であつたり、また地名であつたり、そこで起きたいろいろな出来事、事物も含めて遺跡などの発見によって、それらが常に証明されて、その記述も写本が古いということで、死海写本といったもので証明されているところでありまして。

で、新約聖書の方も沢山の写本が残つています。それはギリシャ語で書かれた原本をギリシャ語で写本したわけですがけれども、その数というのは全部で細かな断片も含めると、5686現在のところあると言われてます。これは数え方によって細かく数字は異なりますけれども。で、そのギリシャ語を他の古代の言語

に翻訳した写本も沢山残っています。これも時代的には非常に古いものばかりです。例えばラテン語に翻訳した写本もあります。そうしたありとあらゆる言語、古代の言葉に訳した写本の数まで全部含めると、新約聖書の写本は総計で 25000 弱あります。そのような写本を基に、ベースにして、それを底本にして様々な言語に翻訳されてきたわけであります。ギリシャ語からラテン語になったり、ラテン語から様々な言語に、ドイツ語になったり、また英語になったり、そして中国語や日本語になっていったわけであります。そんな話をされてもピンときませんという人があろうかと思いますが、敢えてこれらの細かい話をしているのは、聖書がどれほど信憑性の高い、信じるに値するだけの価値のある文献なのかということをお伝えしたいんです。これは比較するとよく分かると思います。皆さんも知っていると思いますが、ローマ帝国のカエサル、ユリアス・シーザーが書いた『ガリア戦記』というものがあります。『ガリア戦記』というものの、それは執筆年代は B.C.100 年から B.C.44 年にかけて書かれたというふうに言われております。新約聖書の時代よりも少し前に書かれたわけです。で、その『ガリア戦記』の最古の写本というのは A.D.900 年です。B.C.100 年頃に書かれたものが A.D.900 年に書かれた写本として残っているだけであります。ですから B.C.100 年ごろに書かれたものが、1000 年近く経ってから書かれた写本だけが今残っているという状態であります。その時間的な距離というもの、丁度執筆されたのが B.C.100 年で最古の写本が A.D.900 年ですから、その時間的な距離というものは 1000 年であることは分かると思います。約 1000 年間離れているわけです。1000 年前の話を書き記した写本だけが残っているというふうに考えて頂ければと思います。で、その数はたった 10 しか残っていません。カエサルの書いた『ガリア戦記』。皆さんは世界史でも習ったと思います。それが歴史的な価値のある信憑性のあるものだとして習ったと思いますが、でもそれらは実は 1000 年も前の出来事を記した写本であって、それはたった 10 しか残っていないんです。でも、それを信じているわけです。歴史的な事実として。新約聖書よりも古い内容です。

で、プラトンのことも皆さんは聞いていると思います。ギリシャの哲学者プラトンです。このプラトンの書いたものは B.C.400 年のものがあります。で、その書いたもので写本として最古のものはやはり A.D.900 年のものです。時間的な距離は約 1300 年ということになります。で、残っている現存している写本の数はたった 7 つしかありません。にもかかわらず私たちはプラトンが実在の人物で彼の書いたものが確かなものだということを頭では信じているわけです。

ヘロドトスという人も名前を聞いたことがあると思います。歴史の父と呼ばれている存在です。そのヘロドトスが書いた歴史、これも B.C.480 年から B.C.425 年に書いたものであるとされていますが、その最古の写本というものの、それはやはり A.D.900 年のものであります。時間的な距離は約 1350 年です。写本の数はたった 8 つしか残っていません。にもかかわらず私たちは「ヘロドトスこそ歴史の父である」と。彼の書いた内容が全部とは言いませんけれども、今日の世界史のベースとなっているわけであります。古代史を知る上で、ヘロドトスは欠かせない存在となっているわけであります。

で、今挙げたものの中で最も写本の数が多いのはホメロスという人の書いた『イリアス』というものがあります。それはかなり古いもので B.C.800 年頃の作があります。で、最古の写本は B.C.400 年のものがあります。時間的な距離はうんと短くなって 400 年です。丁度徳川時代のことを現代の私たちが書くようなものです。でもそれがどれだけ残っているかといいますと、写本数は 643 であります。今言った数字を全部覚えきれなかったかもしれませんが、でもある程度古代の書物というものはそれほど沢山の写本は残っていない。しかも書かれた年代からすると、大分後代になってから、何百年も経ってから書かれたものしか残っていないという印象だけは残ったかと思えます。

それに比べまして新約聖書は、先程言いましたように全部で 5686 もの写本が残っているわけです。他の古代言語の翻訳本も含めると 25000 もの写本が残っているわけです。で、実際に新約聖書は一世紀に書かれたわけです。で、一世紀に書かれたもので、一番古い部分は新約聖書の『テサロニケ人への手紙』と

いうもので、それは A.D.51 年頃に書かれたと言われています。ですから新約聖書で最も古いところは A.D.51 年と考えて頂いて、最も新しいのは恐らく『黙示録』です。A.D.100 年頃です。その時代に新約聖書は編纂されました。全部で 27 巻あります。で、その写本で一番古い部分、それは A.D.114 年のものがあります。断片のもので言えばもっと古いものも発見されてますけれども、ですから時間的な距離、執筆年代と最古の写本の距離というのは、大体 50 年と言って良いと思います。50 年前のことを書いた。勿論 50 年前に生きている人たちもいる時代に書いたわけですから、それは非常に信憑性の高いものとなるわけです。何百年も経てば、歴史を書き換えることも出来ます。もう、その時代に生きている人はいなくなっているからであります。ところが聖書は生きている時代、まだ生存者がいる時代に、その時代のことを見聞きした人が生きている時代に写本が書かれて、それがまだ沢山残っているわけでありまして、その数も半端ではありません。圧倒的な数です。一番多い代表的な古典でも、ホメーロスの『イリアス』は 643 しかないと言いました。それに比べて聖書は 5686 もの写本が残っているわけです。ギリシャ語だけで。凄い数です。ですから、もし新約聖書が基のもの、すなわち原本、最初はたった一冊しか無かったわけですが、それと異なるんだと思うならば、すべての古典を否定しなければいけないということです。それだけ新約聖書というものは信憑性が高いというものです。後の時代の人勝手に書き換えたとか、作り話をしたとか。実際にイエスは神でも何でもなかった。十字架で死んで三日目に甦ったなんていうのは、後で弟子たちが作り上げた、でっちあげた、創作話だと懐疑論者は言います。でもそれは新約聖書の書誌学という観点から見たら、とんでもない過ちであります。すでにイエスが生きている時代、イエスが実際、目の前でよみがえったという時代に行きっていた人たちの時代に、この本が書かれているわけです。しかもその数は半端ではないわけです。まあ、それだけが勿論聖書を信じるに値する唯一の証拠になるわけではありません。

聖書はありとあらゆる迫害にも耐えてきました。世界中に普及しただけではなくて、その普及した先で聖書は弾圧されてきたわけですから。キリスト教徒は迫害されてきたわけでありまして。ローマ帝国において、どれほどのクリスチャンたちが弾圧されて、殉教してきたか、皆さんも見聞きしているところだと思います。この日本というちっぽけな島国においても、徳川幕府の時代にクリスチャンがどれほど弾圧されてきたのか、皆さんも知っていると思います。多くの人は「キリスト教徒は世界中で戦争ばかりしている。」ということをやったりもします。ところが日本において仏教徒がどれだけクリスチャンたちを弾圧してきたのか。強制的に仏教徒に改宗させられて、クリスチャンも神道もその時代は仏教徒とされたわけですから。どの家にも皆仏壇が強制的に設置させられたわけでありまして。そして葬式は皆仏教式でなければいけなかったわけですから。皆全員檀家にならなければいけなかったわけですから。もし、それに反すれば弾圧されたわけですから。「五人組」という制度によって。隣の家で、もしクリスチャンがいれば、連帯責任を問われるわけですから。ですから、その時代から「組」というものが定着していったわけですから。今でもその「組」の名残が残っています。それぞれの地域に「組」というものがあります。それは、もともとはクリスチャンを摘発するためのものであります。皆が皆、同じでなければいけない。日本人の気質というものも、そうした時代に築き上げられていったわけですから。明治に入ってからでもクリスチャンはなおも「高札」が撤去された後も迫害されてきました。その時代からは、「日本は神の国だ」と言い出して、今度は仏教を廃して全部神道にしたわけですから。これは前にも皆さんにお話してはいますが、今は戸隠神社でもかつてはお寺だったわけですから。明治の時代に神社にさせられたわけですから。そして、どの家にも神棚を置きなさいと。ですから大体日本の伝統的な家というのは、神棚もあれば、そして仏壇もあるわけですから。でも何にも知らない日本人は昔から我々の先祖はこれらのものを拝んできたんだと言いますが、昔でも何でもありません。これはつい最近の話であります。調べてみれば分かることですから。いずれにしても、そのようにクリスチャンたちは先々で弾圧されてきたわけですから。現代もクリスチャンはなおも弾圧され続けています。日本には今は『信教の自由』

があります。でもかつてはなかったわけです。聖書を持っているなんてことだけで、大変な目に遭ったわけです。このように自由に礼拝に、教会に集うなんてことは絶対に許されなかった時代であります。でも今でもそういう経験をしている人たちが大勢いるということも知って頂きたいと思います。にもかかわらず、キリスト教はとどまるどころを知らずに、世界のありとあらゆるところに行き届いております。聖書もありとあらゆるところに行き届いております。隣の国の中国のことも考えて頂きたいと思います。当然のことながら共産圏ですから、無宗教・無神論の国であります。聖書は禁書であります。もし、あなたが聖書を持ち込めば、それは取り上げられます。自由に聖書を手にとって読むということが許されていない国であります。文化大革命の時には毛沢東によって聖書はすべて焼き払われたんです。にもかかわらず、人々は渴いて、そして神の言葉を求めたんです。信仰を求めたんです。で、現在では中国には地下教会というのがありまして、そこには聖書が配られております。密かに聖書が持ち込まれています。もしかしたらこの中にも実際に中国に行って、聖書を持ち込んだことがあるという人もあるかもしれません。私の友人の宣教師も実際に聖書を持ち込んで、不思議と捕まらなかったという経験も聞かされましたけれども。いずれにしても、今、中国では約一億人以上のクリスチャンが地下教会に存在すると言われております。それは共産党員よりもその数は多い、凌駕していると言われております。中国は、今、渴いているんです。人々は弾圧覚悟で聖書を求めます。官憲に睨まれても、それでも神を求めようとします。聖書から人生の答えを求めようとします。そのようにして聖書は、ありとあらゆる弾圧・迫害にも耐えて、禁書にされようとも封書にされようとも、それでも聖書は生き残ってきたわけです。その点においても聖書は他の書物とは比べようのないほどに実にユニークなものです。そのような聖書が今日私たちの手にあるというのは、驚くべきことであります。先程主題聖句でお読みした**第2テモテ3:16**をもう一度見て欲しいと思います。

『**聖書はすべて、神の靈感によるもので**（靈感という言葉は英語では“inspiration”（インスピレーション）と言いますが、文字通りは「神の息吹が、息が吹きかけられた」という意味であります。神の命の息吹がこの聖書の言葉の中に吹き込まれている。ただの本ではないです。ただの宗教の經典ではないです。ただの道德の教科書ではありません。ただの古典文学ではないんです。「聖書はすべて、神の靈感によるもので」すなわち、これは神の言葉であって）、**教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**』と。非常に有益な書物であります。まず**教え**において有益だと言っています。“教え”というのは、言い換えれば『正しいことを示す』ということです。聖書はあなたに正しいことを示してくれます。“戒め”というのは、聖書はあなたに間違いを示してくれます。この間違いというのは、具体的には『罪』です。聖書がなければ『罪』とは何か分かりません。勿論私たちが『罪』という時にそれは犯罪行為をすぐにイメージすると思うんですけども、犯罪行為がすべて罪ではないということを皆さんはどこかで分かっていると思います。嘘をついているならば、それは罪です。不倫しているならば、それは罪です。聖書の中で、何が罪なのかということが明記されてます。で、さらに聖書は“矯正”においても有益だと。“矯正”というのは、『どのようにして正しくなるのか』ということです。「間違っていることが分かりました。私が罪人であることが分かりました。」でも、それを知らされただけでは絶望的です。罪を犯せば必ず罰があるわけです。救いが無いわけです。でも聖書は、「その間違った罪人がどのようにして正しくなるのか。理想的な状態に回復されるのか。」そのことを教えてくれます。さらに、『義の訓練とのために有益である。』“義の訓練”というのは、「どのようにして正しくあり続けるのか。」ということ。訓練ですから、一度矯正されても私たちはすぐに自分の弱さの中で間違いを犯して、また罪を犯してしまうかもしれません。でも、そうしたらもう一度聖書は正しい状態に私たちを引き戻してくれて、悔い改めをさせて下さって、そして私たちが続けて正しい道を歩むように、神の道を歩むようにと、聖書が訓練してくれるわけです。そのために有益であると。ですから私たちにとっては、欠かすことの出来ない書物であるということです。イエス・キリストが言われた言葉に『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉によるのです。』（マ

タイ 4:4) と言われました。確かに私たちはパンだけで生きているわけではありません。「日本人は米でも生きている。」と言わないで下さい。そういう意味ではありません。主食、食べ物、肉体を養うそうしたもので生きていくのではないと。人にはそれ以上のニーズがあるわけです。何不自由ない生活を送っていても、「心が空虚です。空っぽです。全然満たされていません。カラカラなんです。どっかに不安があります。私は赦されていないんじゃないか。罪悪感、罪責感を抱えております。言い知れぬそうした恐怖。死んだらどうなるのだろうか。」いろんなニーズがあるわけです。でも聖書はそうしたすべてに答えてくれます。『人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出るひとつひとつの言葉によるのです。』と。確かにその通りだということです。

他にも第2ペテロ 1:21『なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』聖書は預言書でもあります。聖書の4分の1、ないしは3分の1は預言であると言われていています。これは未来のことをあらかじめ正確に語っているという預言であります。『ノストラダムスの大予言』だとか、『エドガー・ケイシーの予言』だとか、そういったものとは全く比べようのないようなものであって、むしろこれは歴史において証明されるものである、非常に具体的で詳細な預言であるということです。如何様にも取れるような、曖昧なものではなくて、象徴的ですがすべて解釈しなければ分かりにくいというような予言ではなくて、具体的に年代であったり、具体的に人の名前であったり、地名であったり、出来事、それらをあらかじめ記している。これは勿論人間には書けないものです。人間は未来のことを正確に知ることは出来ません。言い当てることは出来ません。「でも占いとかがあるじゃないですか。」とあなたは言うかもしれませんが、当たるも八卦です。いい加減なものであります。聖書の場合は、全ての預言は100%成就しております。既に成就したのものもあれば、これから先に起こる、未来について起こる預言も聖書には多く含まれております。そうした預言、これは、やはり聖書のユニークな特徴であります。他の古典には無いものであります。仏教の經典の『三蔵』にも未来予言なんて書いてありません。でも『コーラン』には未来予言があります。でもたったひとつだけです。「ムハンマドという、マホメットという人がエルサレムに戻って来ます。」という、たったひとつの予言だけです。それは誰にも言えることです。ハッキリ言えば、皆さんが「今日、日曜日、長野市の若槻のこのマラナサ・グレイス・フェローシップに来ます。」と言うこととほとんど同じです。それをあらかじめあなたが言ったところで、誰もそれを予言とは思わないと思います。その程度のものしか実は、予言というものが他の古典・經典というものには見られません。でも聖書の中には驚くような預言というものが満ちております。今そのことを具体的に話すわけにはいきませんので、割愛させていただきますけれども、実は例えばイエス・キリストがこの世に来られるという預言について、旧約聖書の中には350以上あります。もう既に二千年前に、この世に来られました。ですからそれらは全て成就したというふうに私たちは歴史的に見ているわけです。350以上のもの預言を今から二千年前にこの地上に来られたナザレのイエスという人が全て成就しました。何年何月にこの世に到来されるのか。そしてまたどの部族から生まれるのか。イスラエルの十二部族の内の一つのユダ部族から生まれるとか。また、イエスはどの町で生まれるのか。それはベツレヘムで生まれるとか。どの町で育つのか。それはナザレの町で育つとか。またイエスはどのような生涯を送るのか。弟子の一人に銀貨30枚で売り渡される、裏切られるとか。そういうことまであらかじめ、その生涯のことが旧約聖書に預言されて、死に方も十字架刑によって死ぬ。そして金持ちと一緒に葬られる。アリマタヤのヨセフという人の墓にイエスは葬られるわけです。で、イエスは三日目に甦る。こんなことまで旧約聖書の中にあらかじめ預言されているわけです。それはイエスが地上に来られるはるか前に預言されたものばかりであります。新しいものでも七百年も前に、古いものだったらイエスが来られる千五百年も前に預言されたものが、果たして今から二千年前のイエスの登場によって全て成就しました。イエスがこの世に実在したということについて、今否定する人たちは誰もおりません。学者の

中にもイエスが実在の人物であるということを否定する者は一人もおられません。「ただイエスが十字架に掛かって死んだところまでは信じて、三日目に甦ったということまではにわかに信じ難い。そんなことは有り得ない。死人が甦るなんて有り得ない。だから、聖書は作り話だ。」と主張する人たちがあつたわけだ。

ところが、このイエス・キリストの復活ですら、これまでありとあらゆる攻撃を受けてきました。イエスの復活さえ否定できれば、キリスト教信仰を破滅させることが出来るからです。ですから懐疑論者という人たちは、キリストの復活を何とかして反証しようと。「イエスは復活したんじゃない」と。「実際にイエスは死んで葬られたけれども、弟子たちが盗んだに違いない」とか。または「ユダヤ当局の人たちが盗んだに違いない」とか、「ローマ当局の人たちが盗んだに違いない」とか、「イエスは実は死んでではなくて、仮死状態で葬られたので、自力で蘇生して、そして這い出てきたんだ」とか。「復活したんじゃない」というような主張をする人たちが大勢おられます。でも今でもイエスの墓を訪れることが出来ます。そこは今でも空っぽです。そしてイエスは実際に復活されたということを、私たちはありとあらゆる観点から、それぞれの今挙げた反証を全て検証しながら、全部それは妥当ではないと証明できます。弟子たちが盗むなんてことは有り得ないことでもあります。全て有り得ないというふうに説明できます。当時は世界最強の軍隊のローマ兵が堅くガードしていたわけだ。イエスの墓には特別な封印が押されておりました。それを破るということは、国家犯罪を犯すということになります。イエスが十字架刑にされる時、弟子たちはびくついて逃げ隠れしていたわけだ。弟子の筆頭のペテロにおいては、イエスのことを公で三度も知らないと言った程であります。そんなペテロが急に奮い立って、イエスの墓を荒らして、そしてイエスの復活をでっち上げるなんてことは、果たして出来るでしょうか。そういったことを一つ一つ取り上げると、とても無理です。イエスが蘇生しただけだなんていうのも、これも無理な話です。一度十字架刑にされて下さい。それから自分で墓に入って、二トンもの石を自力でどかしてみして下さい。その後、屈強のローマ兵と戦ってみて下さい。出てこられるでしょうか。無理な話です。そういった話も今時間をかけて話すわけにはいきませんので、割愛しますけれども、イエスの復活、これは^{まが}紛いもない事実であるということをお私たちは既に二千年間を通して証明してきて、そしてそれは否定されてこなかったわけだであります。イエスの復活が真実であるならば、私たちはイエスの言うことに耳を傾けなければいけません。そのこともチャレンジしたいと思つた。

他にも聖書の記述が本当に正しい、歴史的にも正しいということは考古学の発見でも確かであると言つた。でも、天地創造の話だけはにわかに信じ難いという人もあると思つた。「全てはビッグバンによって生まれて、そして全て進化の過程を経て、今の全ては存在しているんじゃないですか」と。「聖書の記述のように六日間で神が造つたなんていうのは、ただのおとぎ話ですよ」という人もこの中にあると思つた。でも、実際のところ進化論がそれだけ信憑性があるかどうか、よく考えたことがあるでしょうか。それが本当の話であるならば、勿論そこには証拠があるはずであります。でも進化論というものには、一つも証拠が無いということもぜひ知つて欲しいと思つた。で、その話をするにも勿論時間が足りないの、これもそれぞれに任せたいと思つた。いくらでも進化論がどれほど脆弱な^{ぜいじやく}仮説なのか。あくまでこれは仮の説です。定説でも何でもありません。絶対的な真理でも何でもありません。具体的には、例えば人間は猿から進化したと思つたかもしれませんが、猿と人間との間の類人猿の化石というもの、それが中間種です。それさえ見つかれば勿論進化論は容易に証明できるんですけども、それらは未だ見つかつておられません。「でも教科書で習つた。アウストラロピテクスとか、ネアンデルタール人とか、クロマニオン人とか、北京原人とか、いろいろ習つた。それらが中間種じゃないですか。」確かにそう習つたかもしれませんが、それらの中間種の化石というものは未だかつて見つかつておられません。「ネアンデルタール人の化石が見つかつたじゃないですか。最近ニュースでもやってました。」とあなたは言うかもしれませんが、それが中間種だとはだれも証明できないわけだ。単にクル病か何かで背骨が曲がついてたというふ

うにみている学者もおります。現代人と何ら変わらないという、そのことはもう証明されております。でも現代人よりももっと脳が大きかった、脳ミソが大きかったということは証明されています。古代の方がよっぽど現代人よりも頭が良いことは、私たちも知っているところです。今の私たちにはピラミッドは作れません。いろいろと言いたいことはありますけれども、いずれにしても進化論というものにも私たちが全幅の信頼を置くほどの信憑性は無いということを知って頂きたいと思えます。それはあくまで教科書で習うから。学校の先生がそう教えるから。NHKでそうやっているから、じゃないんです。それら一つ一つ検証してみてください。第一線で活躍している専門家に聞いてみてください。生物学の権威という人たちに聞いてみてください。クリスチャンが書いたものでなくても、クリスチャンでない人の書いた科学のいろいろな書物にも目を通してみてください。進化論が鵜呑みにすべきものでないということは明らかだと思えます。

で、話をもう一度聖書に戻していきたいと思えますけれども、聖書は仮説ではありません。仮説はその年その年、その時代その時代に、新説というものが出来てきて、覆されていってしまうものです。それが一時は定説として定着したとしても、新事実の発見だということで、それが覆されることが多いわけです。進化論も勿論覆されます。もともとビッグバンという説も、進化論の説では本来は不都合なものだったんです。ビッグバンというものも聖書の記述に非常に近いものがあります。『**神様が初めに天と地を創造した。**』と、**創世記 1 : 1** は始まりますが、何も無いところから造り出したと。無からの創造を聖書は説きます。でも一昔前までは、宇宙というのは初めからずっとあったんだと。宇宙には起源がないんだと。宇宙は定常説というものがあって、何も最初から起源がなくて、最初から昔のままで永遠に変わらないものだったとアインシュタインですらそう思っていたわけです。でもビッグバンセオリーというのが、ビッグバン理論というものがつい最近では定説のようになってきましたけど、勿論そこから全ての生物が偶然に発生したとは言えないものがあります。いずれにしても、聖書の記述。それは科学の記述と非常に近いものがある、表現こそ古いかもしれませんが、書かれている内容、それについてはむしろ現代の最新科学が聖書の記述に近づいて来たと言ったほうが適切であろうかと思えます。例えば、古代インド人は地球というものは象の背の上に乗っていると考えていました。で、その象は亀の甲羅の上に乗っていると考えました。で、その亀は一匹のコブラの上に乗っていると考えていました。現代の私たちが聞いたら、「ああ、それは確かにおとぎ話ですね。子どもの空想ですね。」と思うかもしれませんが、古代エジプト人は地球というものは五本の柱の上に乗っていると思っていたんです。地球が何かの上に乗っている。それが古代人の感覚でした。で、私たちも勿論何も聞かされていなければ、そのように思っていたかもしれません。でも、今日私たちは宇宙の映像を見ることが出来ます。地球を宇宙から見ることも出来ます。そうすると地球がどこにも乗っかっていない。ただ宇宙空間にポッカリ浮かんでいるということを知っているわけです。で、それは当たり前だと、子どもでも知っています。ところが聖書には既にそのことが記述されていたんです。古代人がまだ地球は象の背の上に乗っているとか、五本の柱の上に乗っかっている。でも、その五本の柱はどこに乗っかっているのか、いろいろ考えればキリがないわけですが、でも聖書は初めから同じ古代の人たちの間であって、「地球は何も無いところに浮かんでいるんだ」というふうに記しております。具体的には**ヨブ 26 : 7** というところ『**神は北を虚空に張り、地を何も無い上に掛けられる。**』“地”というのは直訳しますと、『地の円』です。口語訳聖書では、この“地”というのは『地球』というふうにも訳されます。で、それが何も無い上に掛けられる。これは地球というものが何も無い所にポッカリ浮かんでいるという表現です。で、さらにその前には『北を虚空に張り』とあります。“張り”という言葉も直訳するとこれは『傾ける』という言葉です。北に傾く。今日私たちは地球が何も無い所にポッカリ浮かんでいて、北に傾いていることを知っています。いわゆる地軸です。地軸の傾きによって私たちは春夏秋冬というものを経験しているわけですが、そういった驚くような事実が、まだ宇宙空間にも飛び出た

ことのない時代、このヨブ記というのは実はアブラハムと同時代の人の書いたものですから、今から四千年前のものです。この時代の人たちは、まだ地球が象の背中に乗っかっていたとか、五本の柱の上に乗っかってたと考えていた時代です。驚くべき記述があります。このような記述を勿論科学者は見逃すはずがありません。実際にこのような科学的な記述というものをトコトン追求して、天文学の分野で活躍した人たちもおります。ケプラーという人がその代表です。ケプラーは聖書を文字通り信じました。ケプラーは神学校に入って牧師になるつもりだったわけです。でも彼には天文学への情熱が失われなくて、常にくすぶっていたので、ついに彼は天文学を通して聖書が確かに神の言葉であって、天文学を通して神の栄光を表すんだという決心をしました。

他にも皆さんのお手元の週報にも記されているあの万有引力の法則を発見したアイザック・ニュートン。彼もケプラーから刺激を受けたわけです。りんごの木からりんごが落ちるのを見て、「これで引力を発見した」と言ったのではありません。ケプラーの法則を見て、彼は万有引力の法則を発見したわけですが、そのアイザック・ニュートンはこう言っています。「聖書には如何なる世俗の歴史に見られるよりも、確実な信憑性を証明する証拠が存在する。」近代科学の父がこれを言っています。

他にもアメリカの最も偉大な大統領リンカーンの言葉であったり、またヘレン・ケラーの言葉であったり、エジソンの言葉、聖書に関しての記述がそこにありますから、是非読んで頂きたいと思います。聖書とはどのような書物であって、そしてそれはどれだけ大勢の人たちに影響をもたらしてきたのか。そのことも、三笠宮殿下も刺激を受けております。彼も聖書を信じてオリエントの研究に生涯をささげた人物でもあります。考古学というものは、聖書の記述を証明するために生まれたような学問です。ですから考古学者で聖書を疑っている人たちは殆どありません。実際に考古学の発見によって益々聖書の信憑性は、現代も確かめられているところでもあります。

ですから聖書は確かに神の言葉です。で、聖書自信も何度となく宣言しております。**イザヤ 40 : 8** というところ。『**草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。**』聖書は永遠不滅のものである。そして変わることのない言葉である。聖書は書き換えられたことはありません。それだけの写本の数があると言いました。ですから聖書は、古今東西、ありとあらゆる時代、ありとあらゆる迫害、ありとあらゆる民族を超えて、現代の私たちにまで語りかける神の生きた言葉であります。時代のニーズに合わせてコロコロ変わるのではありません。真理というものは、普遍のものであるはずであります。真理がその時代その時代、その人の主観で変わってしまうならば、それはもはや真理ではありません。そして同じく**イザヤ 55 : 11** に『**そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。**』神が預言者イザヤに語っています。“わたしの口から出るわたしのことば”というのは勿論聖書の言葉です。または預言の言葉と言って良いと思いますが、それは必ず神の望むことを、神の御心を成し遂げるんだと。聖書というのは神の言葉で、神の意志であります。そして、この神の言葉は必ず成就する。すなわち神の意志は必ず確実に実行に移されるということです。聖書に書かれていることは必ず実現します。絵に書いた餅ではありません。ここに書かれていることは全部机上の空論ではないんです。本当のことであって、本当に書かれている通りのことがその身に起こるわけです。その時代に必ず起こるわけです。ですから新約聖書の**ヘブル 4 : 12** というところにも目を留めて頂きたいと思います。聖書自身の力というものを是非見て欲しいと思います。『**神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。**』神の言葉は、聖書は生きています。神の息吹によって生きています。そして力があります。「**心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができる**」と、ありますけれども、聖書の言葉によって聖書自体が私たちの心の闇に光を当てて、心が混沌としていて、心が滅茶滅茶に乱れていて、散り散りばらばらに分かれていて、

自分でも一体どうしたら良いか分からないし、自分でも何を考えているのかも分かりません。」と、完全に自分が崩壊してしまいそうな状態。今日でいうところの心の病。そうしたことに陥った時でも、聖書はメスのようにして、あなたの心をしっかりと切り分けて、そしてあなたに必要なことを示し、そして聖書自体があなたにカウンセリングを行なってくれます。この中にも世間で“心の病”だと診断されて、「あなたのはうつ病です。深刻です。薬がないと駄目です。精神科にかかりなさい。カウンセリングを受けなさい。」と言われて、高い診察料を払って、そしてたくさんのお金をかけて、薬を飲み続けて、それでも全然良くならない。このままでは一生薬漬けだ。医者に一生頼らなければいけないのではないか。」いろいろな思い煩いをして、悩ましく思っていて、行き詰まっていて、そんな時に聖書に出会って、聖書の言葉によって全てが変えられて、「もう私にはカウンセラーは要らない。もう私には精神医療は要らない。もう私には薬は要らないんです。」と、そのように劇的に変えられた人がこの中には何人もおります。何人も私は知っております。聖書は心のはかりごとを完全に判別することが出来るんです。勿論私は精神医療というものを全否定するわけでもありません。カウンセリングの必要性も勿論覚えております。薬も時には有効でしょう。でもそれらには依存性もあり、それらには副作用もあります。で、勿論それらにはお金があり、そしてそれらには勿論製薬会社と政府との間にいろいろな密約があるわけです。病気という病名をつけなければ、病院で診てもらえないんです。保険は適用されないんです。薬は出してもらえないんです。でも、ここではちゃんとお金が発生しますから、儲けがあるわけです。患者さんたちはそのようにして、絞られているわけです。こういった話も時間がないので、したくはないので、避けますが。

でも、いずれにしても聖書は無料です。ここに来て私は皆さんから講義料をとるわけではありません。誰でも聖書は手にできますし、誰でも聖書は読むことも出来ます。学ぶことも出来ます。ただです。無料です。しかも聖書は、生きていて力がありますから、一度聖書を信じるならば、この聖書があなたのうちで働き続けてくれます。ここでもう一箇所、**第1テサロニケ 2:13**を開いて頂きたいと思います。『こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。』“事実どおりに神のことばとして受け入れて”、そして神のことばとして信じるならば、あなたのうちでこの生きた言葉は働きます。そして実際に人生が変えられたという人もこの中に大勢いるわけです。私もその内の一人であります。聖書の言葉に出会ったので、私は人生のどん底から救われてきました。聖書との出会いがなければ、きっと私は今生きていないと思います。それだけの生き方をしてきたわけです。若くして死ぬような退廃的な生き方をしてきたわけです。親でもどうにも出来なかったんです。教会の牧師もどうにも出来ませんでした。宣教師の人にもお世話になりました。カウンセラーと呼ばれる人たちにもお世話になりました。学校の先生や教育家と呼ばれている人たちにもお世話になりました。仏教のお坊さんにもお世話になりました。でも、誰も私を変えることは出来なかったんです。ところが聖書の言葉に出会って、全てが変わりました。そのような生きた証しを持っている人たち、聖書は正に文字通り神の言葉で、生きていて力がありますということを手高らかに証明できる、宣言できる人たちが、この中に大勢おります。私一人がただ大声で言わなくても、皆さんの中でも「大声に出してそのことをハッキリ言いたいです」と、いう人がこの中に大勢いることを喜ばしく思いますけれども、是非そうして頂きたいと思います。この神の言葉が必要な人たちが、私たちの周りには大勢います。「どうしたら良いか分かりません。もう終わりです。もう駄目です。どうにもならないんです。」絶望的に今、希望を失ってしまっている人たちが私たちの周りに大勢いると思います。慰めを必要としている人たち、人生の導きを必要としている人たち、力を必要としている人たち、助けを必要としている人たちが、私たちの周りに大勢います。是非この聖書の言葉が彼らの助けになるということ、力になれるということ、彼らの答えになるということ、を伝えて頂きたいと思います。なぜ

ならば、「自分においてそのことが証明されたからです」というふうに証しして頂きたいと思います。決してこれは机上の空論ではないんだと。「私を見て下さい。私もこういうところを通ってきました。私もこういう目に遭ったんです。私もこういうところでこのように苦しんでいたんです。でも、このように聖書に出会って変えられました」と。具体的に実例を、自分の生き様を通して伝えて欲しいと思います。

いくら聖書が神の言葉だと知っても、認めても、信じなければ何の効力もありません。信じているあなたがたのうちに働くのですと、先程の**第1テサロニケ 2:13**には書いてありました。ただ読んでいるだけでは、何も変わらないと思います。ただ勉強しているだけでは、あなたは今まで通り、パッとしない人生かもしれません。でも、信じるならば、必ず変わります。

聖書には具体的な効力として、これは聖書の箇所は開きませんが、箇所だけ言います。その聖書の具体的な効力とは、まず人を救うというものです。ヨハネ 20:31、また**第2テモテ 3:15**にも同様に書いてあります。これは今日の主題聖句の丁度前の節です。

で、聖書はあなたを霊的に成長させてくれるものです。**使徒 20:32、第1ペテロ 2:1-2** 生まれたばかりの乳飲み子のように慕い求めるように書いてあります。赤ちゃんにはミルクが必要です。

で、聖書はあなたに信仰を与えます。**ローマ 10:17**、「私には信仰がありません。信仰が足りません。信仰が薄いです。」信仰の不足を感じている人があるならば、是非聖書を読んで下さい。『そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。』と、そこに書いてあります。

また、聖書はあなたをきよめます。汚れたあなたをきよめてくれます。汚いあなたをきよめてくれるんです。聖書を読めば読むほど、学べば学ぶほど。**エペソ 5:26-27**に「みことばの水の洗いをもって、私たちをしみもしわも傷もそのようなものの何一つない者に変えて下さる」と、書いてあります。

また、聖書はあなたに喜びと楽しみをもたらしてくれる。**エレミヤ 15:16**に書いてあります。「喜び楽しむ。」皆さんはいろんな娯楽や快楽で喜び楽しんでいるかもしれません。酒をあおって喜び楽しむ。パチンコ屋に行って喜び楽しむ。オリンピックを見て喜び楽しむ。今晚大河ドラマを見て喜び楽しむ。色々あると思います。ゲームをしながら。でも、それらの喜び楽しみは一過性のものです。時には後味が悪かったりします。虚しさを感じたりします。でも、聖書がもたらす喜び楽しみは、もっと深いものです。もっと豊かなものです。決して誰もあなたからそれを奪い取ることが出来ない、永続するものであります。その深い喜び楽しみを聖書を通してあなたは得ることが出来ます。

聖書は希望を与えます。希望を持ち得ないその絶望的な状況にあって、希望を与えるもの。**ローマ 15:4**にあります。

聖書は、良いものと悪いものを見分ける力を与えます。識別力を与えます。**ヘブル 5:11-14**。良いものと悪いものを見分ける力。

他にもいろいろなものが聖書の効力として聖書の中に約束されてます。**詩篇 19:7-8**。そこはちょっとお読みしますので聞いて頂きたいと思います。丁度詩篇というのは、聖書のど真ん中辺りです。詩篇 11:7-8に聖書の効力について書いてある箇所があります。

『主のみおしえは完全で（“みおしえ”というのは聖書の言葉です。）、たましいを生き返らせ、主のあかしは確かで（これも別の表現で、同義語で神の言葉です。）、わきまのない者を賢くする。⁸主の戒めは（これも聖書の言葉。）正しくて、人の心を喜ばせ、主の仰せはきよくて（これも神の言葉です。）、人の目を明るくする。』これらもすべて御言葉の効力です。もっとその効力を知りたいければ、是非同じ詩篇の119篇を読んでみて下さい。詩篇の119篇、聖書の中で一番長い章です。困ったときには、人生が火事だと思ったら119篇、開いて見て下さい。そこにすべての答えが載っております。聖書がどれだけあなたの助けになるのか。そのように聖書というものを捉えて頂いて、そして常に傍らに置いて頂いて、常に必携して

頂いて、どこへ行くにも聖書を携えて欲しいと思いますし、携えて行けなくても心にたくさん蓄えて頂きたいと思います。その都度その都度、ありとあらゆる人生の局面で、その聖書の言葉が、神の言葉が、あなたの力となります。すべての状況において、あなたの希望となります、励ましとなります。そして慰めとなります。是非そのことを信じて、聖書を開いて欲しいと思います。そのように祈り心をもって聖書を慕い求めて欲しいと思います。ただ何となく読むんじゃなくて、クリスチャンだから義務だから。皆が読んでるし、プレッシャーだし。いろいろなことでいろいろな動機で皆さんは聖書に取り組もうとするかもしれませんが、是非聖書は神の言葉で、人の言葉ではありません。

人からもいろんなアドバイスを聞くとします。どうすべきだとか、ああすべきだとか。私も牧師ですからいろんな人から相談を受けます。でも私は誰一人として「こうすべきだ。ああすべきだ。あなたはこうしなければいけない。ああしなければいけない。」と指示したことはありません。アドバイスもしません。

「聖書には何と書いてありますか。御言葉はこう言っています。」それだけです。で、それは私が言わなくても、聖書を開けば分かることですから。強いて私がアドバイスするとすれば、あなたが聖書から離れようとしているならば、聖書に立ち返るように。神様が何と聖書の中で言われているのか。それがすべてであります。聖書の中でテーマとなっているのは、イエス・キリストであります。私たちはイエス・キリストを知るために聖書を開いているわけです。で、そのイエス・キリストが私たちにとっては、勿論救い主であり、そしてイエスは別の箇所（イザヤ 9：6）では『不思議な助言者』英語の聖書ではその部分では”Wonderful Counselor”となっております。私がカウンセラーじゃないんです。私が相談を受けるんじゃないんです。勿論悩み事は聞いたりします。勿論相談を受け付けることはします。でもそれは単に“受付”だけです。カウンセリングのクリニックを想像してみてください。私はカウンセラーじゃなくて、カウンセリング・クリニックの受付係です。受付のおじさんです。そこにあなたが来て、「先生にお会いしたいんです。」と言ったら、私はただ取り次ぐだけです。「分かりました。先生はこちらです。」と言って、ワンダフル・カウンセラーを紹介するだけ。それが私の仕事です。ですから、皆さんが相談に来て私には答えがありません。でも私には答えを持っているお方があります。私はその方をよく知っています。よく知っているのです。皆さんにはすぐに紹介できるんです。知らない人のことは紹介できません。ですから、皆さんはそうのようにして聖書を通してイエス・キリストに出会うことが出来るんです。こうして私が聖書を教えているのは、皆さんが聖書のイエス・キリストに出会うためです。すぎるためです。アドバイスを求めるためです。どうしていいか分からない人たちに、答えはイエス・キリストが聖書の言葉を通して、必ずあらわして下さいます。

最後に聖書のテーマがイエス・キリストだと言いましたので、その箇所もちょっと確認のために開いて頂きたいと思います。聖書をダラダラ読むんじゃなくて、ただ何となく全巻通読しよう、読破しようなんて考えじゃなくて、その中に必ずイエス・キリストを見出すように読んで頂きたいと思います。勿論信じて読まなければ何の効力もあなたには味わえないわけです。発揮されないわけですが、一番効力を得る上で早道は、その中にイエス・キリストを見出すようにして読むという読み方です。ルカ 24：27 に目を留めて見て下さい。『それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事がらを彼らに説き明かされた。』聖書の中にイエス・キリストについて書かれていることがら。これは具体的には勿論旧約聖書の中です。旧約聖書 39 巻の中にイエスについて沢山の事が書いてあるんです。で、同じくルカ 24：44 です。『さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』モーセ五書にしても、先程読んだイザヤ書の預言書にしても、また先程開いた詩篇の中においても、すべてそこにはイエス・キリストのことが書いてあるんです。イエス・キリストはご自分のことを『ことば』と呼ばれています。イエスは

自分のことを「ことばである。生きたことば。いのちのことば。」ヨハネの福音書1:1にも『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』で、その「“ことば”は人となって私たちの間に住まわれた」とヨハネ1:14に書いてあります。ですから、神の見えないことばが私たちと同じ人間の姿をとって来て下さった。神様がどういう方かを私たちに示すために、ディスプレイするために、神が人間となって来られた出来事、これがクリスマス。二千年前の出来事であります。で、そのイエスについて聖書は記しているわけです。

またヨハネ5:39,46をお読みします。『³⁹あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。(飛ばして) ⁴⁶もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。』創世記の天地創造の物語もアダムとエバがエデンの園を追われる物語の中にもイエスは登場します。あの十戒が与えられた場面でも、勿論その前の紅海が真っ二つに分かれた場面でも、皆さんは映画でその場面をよく知っていると思います。チャールトン・ヘストンが杖を上げると水が真っ二つに別れるあのダイナミックなシーンです。あれも全部イエス・キリストに関わる内容なんです。「知りませんでした。」という人は是非そのように読んで欲しいと思います。そうするとあなたの心の中に何かが起こります。神の言葉が信じるあなたの内に働きます。

バイブル・スタディーにしても、この礼拝にしても、皆さんが普段家で聖書を読むデボーションの時間にしても、目的はただ聖書を読む、ただ聖書を学ぶ・勉強することではありません。そうではなくて、私たちは聖書を通してこの中に書かれているお方、人間となられた言葉であるイエス・キリストと人格的な交わりを持つために、私たちはこうして今日この礼拝に来たわけでありまして。イエス・キリストと人格的な、個人的な親密な交わりを持つためにここに来たんなんです。勉強しに来たんじゃありません。ただ単に宗教の儀礼を守るため、礼拝プログラムをこなすために来たものではありません。ここに来たのは、イエス・キリストを個人的に知るため。この方と深いレベルで交わりを持つためであります。学識を深めるためではありません。聖書の一般教養を得るためではありません。イエス・キリストとの人格的な交わりを深めることを目的として私たちはこのように毎週のように、または毎日のように教会に集まって来るわけです。毎日家で聖書を読むのもそれと同じことでもあります。神様との交わりです。コミュニケーションです。私たちはそのように神のことを知っております。そういうレベルで知っているんです。一年に一回初詣するような神じゃないんです。何かの度に願掛けするような神じゃないんです。法事の度にとか、葬式の度に挨拶するような神じゃないんです。この神は私たちと常に日常を共にして下さるお方です。苦楽を共にして下さる方です。現実の世界に生きている現実の神です。ですから私たちは現実の問題において、この現実の神を求めるわけです。そうすると現実の問題に現実的な回答がこの方から与えられるわけでありまして。そのような経験をした人たちがクリスチャンと呼ばれる信者であります。私たちは何を信じているのかと言えば、この聖書の神を信じているんです。この聖書に書かれている言葉となられた人格を持っている生きた真の神を信じているんです。この神はどこにでもおられます。教会の中だけでなく、家の中にも、職場にも、あなたがたった一人の時でも。「孤独で誰も自分のことを分かってくれないんだ」と寂しく思っている時でも。神なんか居そうもないようなその所にもいるんです。そこに神はいるんです。だから私たちは、この神をもっと知りたいと思って、そしてこの神との歩みが本当に幸いであること、平安であること。そこには私たちの思い煩いや恐れ、不安を締め出す力があるということを知っているから、私たちはこのように足繁く教会に通い、人から見れば「意味のないことじゃないか。こんな休みの時に。」とか、「聖書なんか読んでる時間があれば、もっと建設的なことを、もっと実際的なことをやった方が良くないじゃないか。」とか、いろんな人は勝手なことを言うかもしれませんが。でも、私たちは、信じている私たちは分かっております。そういう人たちに言ってみて下さい。「私がもし聖書を知らなければ、聖書と出会ってなければ、

私は今、このようには生きておられません。あなたの目の前に居なかったかもしれません。」言ってみてください。「もう私はあなたと別れていたかもしれません。」とか、「もうとっくに家出していたかもしれません。」とか、「もうとっくに刑務所に居たかもしれない。」とか、「とっくに自殺していたかもしれない。」とか。私は正にそのような者でした。このように皆さんと顔を会わせるようなことが出来る、そんな明るい人生を歩んできたわけじゃありません。もっと暗いところを歩んできました。ですから、そういうところから私は救われてきたので、力強くこのことを証し出来るわけです。聖書の効力を知る者として、高らかにこのことを宣言しているわけであります。皆さんも是非、机上の空論としてではなくて、絵に描いた餅としてではなくて、実際に信じている私たちの内に働く力があるんだということを、皆さんの生き様を通して、伝えて欲しいと思います。きっとそれは誰にも否定できないことですから、受け入れざるを得ないと思います。あなたを見れば人は信じると思います。「私を見て下さい。聖書の言葉がなければ、私はもっとひどい人間でした。聖書の言葉がなければ、もっと私はいい加減な者でもっと弱い者でした。今は完璧ではありませんけれども、それでも聖書の言葉によって変えられて、今日支えられているんです。」と。それは否定できない事実だと思います。それを見ている人たちは分かっていると思います。それでも信じないと言うならば、ただ単に信じたくないだけであります。信じることが出来ないということは絶対に言えないわけであります。今までお話しした聖書の客観的な一般教養の話をしただけでも、それは十分証明できたと思います。なんだったら進化論をトコトン調べてみて下さい。なんだったら考古学をトコトン調べてみて下さい。なんだったら書誌学をトコトン勉強して見て下さい。なんだったらキリストの復活が本当に史実かどうかトコトン勉強して見て下さい。そうすれば本当に信じるか、信じるに値するかどうかは簡単に証明できると思います。この聖書の言葉を信じたが為に、命を落とした人が過去に大勢いるわけです。今もいます。迫害されて目の前で妻子が殺される。それでも聖書を捨てなかったんです。それでも信仰を捨てなかったんです。命を懸けるに値するだけのものがここにあるならば、信じるに値すると思います。あなたには命を懸けるほどのものがあるのでしょうか。人生を打ち込めるだけのものがあるのでしょうか。それを問われればきっと聖書しかないんだと。聖書の神だけが唯一人生を懸けることが出来る、全存在を委ねることが出来る神であると。そういう結論に至ると思います。にもかかわらず、「信じない。信じられない。」と主張する人たちは知って欲しいと思います。あなたの本音は神は全部ご存知です。聖書にそう書かれています。あなたは、単に信じたくないからです。聖書はあなたの考え、はかりごとをすべて判別することが出来ます。あなたは信じたくないだけです。「知らないんだ」と意図的に無知を装っているだけです。そのことも最後チャレンジしたいと思うので、本当はそこを開いて読んで終わりたかったんですけども、時間の関係上読むことはしませんが、是非家で読んで見て下さい。ローマ 1:18-23。そこにはどういうことが書いてあるかと言いますと、『²⁰神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。²¹それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。²²彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、²³不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。』偶像礼拝です。仏像や動物の像、それを拝むようになったわけです。でも頭では分かっているんです。神様は目に見える存在ではない。神様は人間が作り上げたようなものではないということを知っているんです。でもその神を認めてしまうと、自分にとっては都合が悪いわけです。自分のやりたいようには出来ないわけです。都合の良い神を拝んでいる方が楽なわけです。「クリスチャンは仏壇にも手を合わせない。先祖を大事にしないのか。」と言う人たちもいます。でもそういう人たちにハッキリ言いたいことがあります。「あなたは先祖を造った神を拝まないんですか。先祖を敬うならば、あなたは先祖を造った神ご自身を敬うべきではないですか。」弁解の余地はありません。

そして、もう一つ。人にはプライドがあります。ヨハネ 5 : 40-44 に、そこには、読みませんが、人はプライドがあるので、そういうつまらないプライド、かなぐり捨てて下さい。それが信じることに於いて障害になります。

また、もう一つの障害は、道徳的な問題です。信じられないのではなくて、信じたくないという本音です。ヨハネ 3 : 19-20。そこはちょっと読み上げますから聞いて下さい。人が信じない理由です。キリストを信じない理由。『¹⁹ そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに（光はイエスです。）、人々は光よりもやみを愛した（やみは罪の生活。自己中心の生活。）。その行いが悪かったからである。²⁰ 悪いことをする者は光を憎み（キリストを憎み）、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。』これが本音です。信じられないという知的な問題ではありません。理性の問題ではなくて、信じる事が出来ないんじゃなくて、本当は信じたくない。道徳的な問題です。自分の闇が暴露されるのが嫌なんです。だから人は信じないんです。でも聖書はそのことを逆に暴露してくれております。この暴露されたあなたは、今どう受け止めるでしょうか。ヨハネ 7 : 17 に『だれでも神のみこころを行おうと願うなら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります。』と、イエスは言われました。あなたにも分かるはずです。では、これで最後お祈りして終わりたいと思います。